

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

観察するって面白い／さいたま市立東大成保育園

子どもたちは、興味・関心をもったものに対して、「よく見たい！知りたいたい！」思いでいっぱいです。

身近に、よく見るための環境があれば、じっくり見たり、何度も見たりして興味を深めていきます。また、よく見ることを通して、感じたこと考えたことを人に伝えようとしています。



友達や保育者に受け止められたり共感されたりした子どもたちは、さらに対象への探求を深めます。

今回は、よく見るためのグッズや保育者の関わりを工夫している園の事例をご紹介します。



● ガガンボとの出会い／5歳児

- 給食後、保育室の壁に1匹の虫が止まっていることにAちゃんが気付いた。「あの虫は何だ？」「クモかな？」と数人が集まったところに、Bちゃんが、見ていた図鑑を差し出した。
Aちゃん：「クモだよ、きっと」
Bちゃん：クモのページを開き…「なんか違う」
Cちゃん：「足は何本？」
Bちゃん：「8本（クモ）」
などとやりとりを繰り返す。観察する子どもと図鑑で調べる子どもとで分担しながら7～8人で調べた結果Dちゃんが、「これじゃない？」と言い、その場にいた全員で「本当だ『ガガンボ』だ！！」と分かって喜ぶ。
- 「先生捕まえて」と言う子どもがいたが、乱暴に扱ってしまいそうな気がしたため、保育者は「かわいそうじゃない？」と返事をした。
- 子どもたちの姿からは、「捕まえない」「でも届かない」という葛藤が見られた。と同時にガガンボが下りてくるのを待とう、という強い期待が伝わってきた。
- 「ガガンボーそこで待っててねー」「ぼくたちお昼寝してくるねー」と子どもたちは、お昼寝へ向かった。その頃には、ただの“虫”ではなく、思いのこもった“ガガンボ”になっていた。
- お昼寝後、「ガガンボまだいるかな？」と、一目散に保育室へ向かう子どもたち…。「いたー」「待っててくれてありがとう」と大感激する。そして、キョロキョロと、ガガンボがそこにいることを確認しながらおやつを食べた。
- その後「ガガンボー下りてきてー」「おいでー」と必死に呼びかける。が、手が届くところにはなかなか来てくれない。そこで、子どもたちは、「ねえ、先生お願い！！」と言う。
- まったく諦めない子どもたちの熱意に応えることにした保育者が、やっとのことで網で捕まえた。
「やったー」と大歓声をあげる子どもたち。
「死んじゃうからそーっとね」と協力してそっと観察キットに入れる。
- 「うわっ、足にギザギザがある」「見せて」…「本当だ」「見えた？」
僕も、私も、と交代で観察する。
- 存分に観察を終えた夕方、「どうする？逃がしてあげようか」という声があがる。そして、園庭の桜の木の下で放した。
「元気だねー」「クモの巣につかまらないように気を付けてね」「また来てね」と手を振り見送る子どもたち。
「私たち、ガガンボと友達になったんだ！」と一人の子どもが保育者に伝えた。



- 観察する楽しさを味わったことで、次の日からいろいろなものを調べて回るようになった。そこで、保育者は、観察キットに加え、顕微鏡や虫メガネも用意した。
- 虫を発見した子どもは、「虫発見！名前は？」と、興味をもち、「調べてみよう」と言いながら、顕微鏡を使っていた。
- 給食に出た甘夏をよく観てみたいと思った子どもは、「なんかツブツブが見える」「レンズで大きくして見てみよう」などと言いながら、じっくり観察をしていた。
- 他の子どもたちも、「チューリップの根っこどうなっているの？」と興味をもちたり、絵本「ミッケ！」[※]を広げながら、虫メガネで拡大して確認したりしていた。
([※][ミッケ！シリーズ](#) 文/ジーンマルソーロ 写真/ウォルターウィック 訳/糸井重里 小学館)
- 「もっとよく見たい！」と、探究心が強まると、子ども同士で工夫し始める姿が見られる。Dちゃんは「下が白いとよく見えるよ」と、容器の大きさに合わせて白い紙を切り抜き観察キットに敷き使っていた。
Eちゃんは「明るくすると、よく見える？」と、ライトを当てて試してみる。
Fちゃんは「(レンズを)ピカピカにしたらどうかな？眼鏡拭くやつない？」と言ってくる。保育者が提示すると、眼鏡拭きを使って観察キットのレンズを磨いていた。
- 保育者は、子どもたちの声を拾い、受け止めてできる限り自分たちの考えたことが試せるような環境を用意した。



✦ 振り返って

- ガガンボとの出会いが、子どもたちにとって大きなきっかけになり、目をキラキラと輝かせ、熱中して観察する姿やこれもあれもと調べたがる姿…に繋がった。“どうなってるの？”“おもしろそう”と心を動かす瞬間が「科学する心」の入り口であるのではないか。保育者は、この様な子どもたちの姿に魅力を感じた。また、“子どもっておもしろい”と改めて感じさせてくれた瞬間でもあった。
- 観察する楽しさに、のめり込む日々。初めは数人で始まった遊びだったが、その姿に他の子どもたちが関心を示し、次々に輪が広がっていった。そのような子どもたちの様子を、担任が職員会議で報告したことで、全職員がこの研究者たちを見守ってくれた。
“楽しい”と感じたことが次の“なんだろう？”“調べてみたい”に繋がり、その熱中する姿が他の子どもたちの“楽しそう”に繋がる。探究心が深まり、広がりを見せた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」